



「ジェーン・エア」を再読 して



小城ゆり子著

youko103

「ジェーン・エア」を再読して

私に影響を与えた本といえば、少女の頃読んだ「あしながおじさん」と「ジェーン・エア」だろうか。「あしながおじさん」は小学生の私に夢を与え、「ジェーン・エア」は思春期に入りかけていた中学生の私に人を恋すことの美しさを教えてくれた。

今、私は「ジェーン・エア」の文庫本を買って、およそ五十年ぶりに再読してみた。自分が青春をとうに過ぎても、この物語の魅力は少しも失せていなかった。

貧しく、つらい子供時代をおくったジェーン。そして聰明だが別に美人でもない娘に成長し、同じく薄幸な子供の家庭教師となり、その子の保護者である主人・ロチエスター氏と恋に落ちる。ロチエスター氏は、もう中年だし、お金持ちだが醜男である。これは、美男、美女の恋物語ではないのだ。

ロチエスター氏と婚約したジェーンだが、この結婚には大きな障害があった。彼には狂人の妻がいたのである。

狂って、館の中でわめき、火をつけたりする妻。十九世紀の物語ではしようがないことだが、これには精神障害者に対する差別がある。が、それを言ってもはじまらない。かのシェイクスピアにだって、「ベニスの商人」にはユダヤ人差別が、「オセロ」には黒人差別があるので。文学者も時代に束縛されている。

ロチエスター氏は、ジェーンに、自分は妻が狂ったから嫌ったのではない、妻はもともと淫乱なのだ、もしもジェーンが狂ったとしても自分はジェーンを嫌ったりしない、と言う。これがこの時代のぎりぎりの良識かもしれない。

ともあれ、ジェーンは、ロチエスター夫人の存在を知り、館を逃げ出し、荒野をさまよう。幸いにして、親切な牧師一家に助けられたからいいようなものの、こんな無謀な家出をしたら無事ではいられないところだ。

ロチエスター氏の情婦になるわけにはいかない、とジェーンは考える。妻になれなければ、「情婦」なのか？ 日本なら、昔でも、「内縁の妻」というところであろうに。まして、二十一世紀のイギリスでは、法律に縛られない事実婚が認められているだろう。少女時代の私は、どう考えただろう？

結婚できないジェーンがかわいそう、と私は涙したことを覚えている。狂気の妻が火事で亡くなつて、ほんとうに良かったと胸をなでおろした。私は正式の結婚よりも純粋な愛を尊重していた少女だったが、このときは十九世紀のこの道徳を批判する力はなかった。

神の前で結婚の契約を誓うことがそんなに重要か？ 形だけの妻でも、妻のいる人を愛してはいけないのか？ 一度結婚したら、どんなことがあっても、契約は守らなければならないのか？ これらは、大いに疑問である。

それでも、少女の私は、この物語に感動し、泣いた。自分に引き比べて……私は孤児でこそなかつたが、子供時代、やはり幸福でなかつた。友だちや教師にいじめられた。美人でもかわいくもなかつた。劣等感にさいなまれていた。こんな私でも、ジェーンのように、愛してくれる人にめぐりあえるだろうか？ 「ジェーン・エア」は、不幸な生い立ちの美人でない少女に夢を与

えてくれた。それはとても大きなことだった。

夢を与えられて、それからの私はどうなっただろう？ 自分が正当に評価されていないといいうじましい気持を持ち続けて、ひねくれて、その反面、自分はほんとうは誰にでも愛される資格のある女などとおかしなエリート意識を持った。そのため、若い頃の恋にはことごとく失敗した。結婚できたのは、三十歳を過ぎてからだった。

一冊の本に過重な期待をかけてはいけない。私は「ジェーン・エア」が与えてくれた恋愛の夢の世界に感謝すべきなのだ。

それにしても、なぜジェーンは、過酷な子供時代に苦しみながら、人を心から愛せる女性に成長できたのだろう？ それが、不思議でもある。